

支援教育コーディネーターに求められる教育相談の視点を整理する

—支援教育コーディネーターの教育相談力を支える研修に向けて—

教育相談センター指導主事研究会議

山田 礼子

松崎 博晃

小林 正史

荒谷 健一

I 主題設定の理由

今年度、支援教育コーディネーター（以下 Co）がすべての市立学校に位置付けられた。

Co は、障害のあるなしに関わらず児童生徒一人一人の教育的ニーズに適切に対応していく川崎市の支援教育を推進する中心的役割を担う（「Co 必携」より）。Co は川崎市教員育成指標（図1）の中では、ステージⅡの終わりからステージⅢにあたる教員で、基本的には、教員としての「学習指導等」や「児童生徒指導等」の力については各種の研修を終え、学校マネジメントの専門的資質・能力の育成を図る段階にある。しかし、在籍するすべての児童生徒に対して、一人ひとりに適切な支援を実施できるよう体制を構築することを業務とする Co には、一般の教員に増して、より専門的な「児童生徒指導等」の資質・能力の育成は欠かせないだろう。

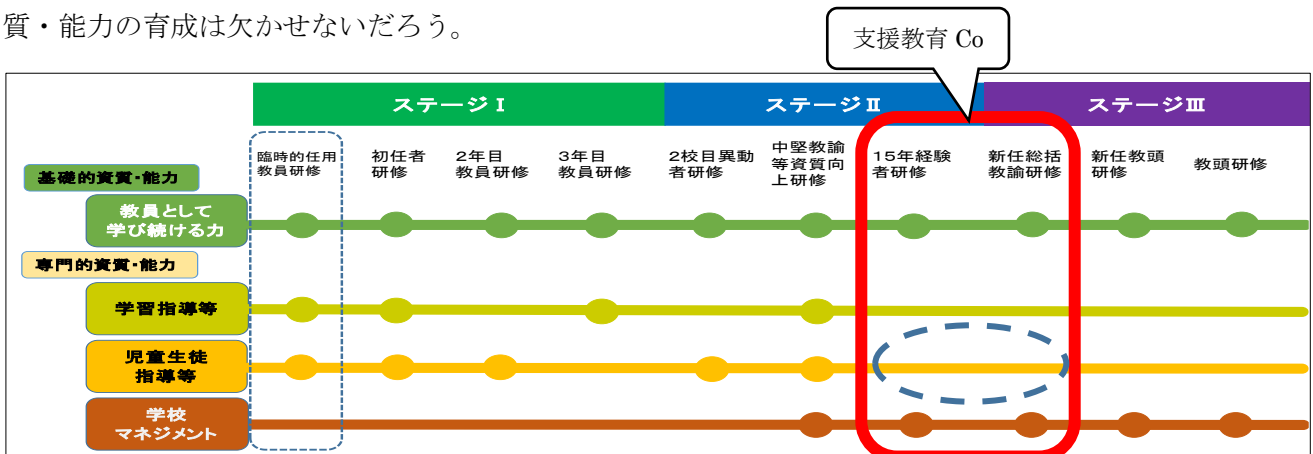


図1 川崎市教員育成指標

では、「児童生徒指導等」とはどのようなものだろうか。生徒指導提要（令和4年12月改訂）では、このように示されている。

生徒指導は児童生徒理解に始まり、児童生徒理解に終わると言われるように、生徒指導におけるアセスメント（見立て）の重要性は言うまでもありません。理解の側面を抜きにした指導・援助は、働きかけの幅が狭くなり、長い目で見たときの効果が上がりにくくなります。例えば、すぐに暴力をふるう児童生徒に対する指導において、どうしてその児童生徒が暴力に訴えるのかという「理解」をせずに一方的な働きかけをしても、問題の根本的解決に至ることは難しいからです。児童生徒理解とは、一人一人の児童生徒に対して適切な指導・援助を計画し実践することを目指して、学習面、心理・社会面、進路面、家庭面の状況や環境についての情報を収集し、分析するためのプロセスを意味します。その点において、教育相談の基盤となる心理学の理論やカウンセリングの考え方、技法は児童生徒理解において有効な方法を提供するものと考えられます。（「3.4.1 生徒指導と教育相談」）

「児童生徒指導」の核心は「児童生徒理解」であり、それを支えるものとして「教育相談の視点」が有効であるということである。これは Co だからということではなく、学級担任などすべての教職員に求

められる、教師としての専門的資質・能力である。児童生徒が「どうして」そのような行為、そのような状態にいたったのかは、本人さえもわからないことが多い。その「どうして」を教師が理解していくためには仲間が必要である。そして、その仲間に率先してなるのが Co であり、さらに Co は、「どうして」を一緒に理解しようとするだけでなく、仲間をコーディネートして支援のためのチームづくりをする。このとき、より専門的な児童生徒指導等の力が必要であり、より豊かな「教育相談の視点」をもっていることが Co の取組を支えることになる。Co に必要な「教育相談の視点」とは、どのようなものなのだろうか。

教育相談センターとして今回は、担当している研修実施と Co と関わる業務の中で見えてきたものや考えられることを「教育相談の視点」でまとめ、Co に求められている力を整理したい。教育相談の視点で支えられた児童生徒理解と、その理解に基づいて実践される児童生徒指導を「教育相談力」ととらえ、本研究では Co に求められる教育相談力を明らかにし、より効果的な Co 研修の実施につなげたいと考え主題を設定した。

支援教育コーディネーターに求められる教育相談の視点を整理する
—支援教育コーディネーターの教育相談力を支える研修に向けて—

II 研究の内容

1 支援教育コーディネーターの実態把握

まずは Co が実際、学校でどのようなことを意識して仕事をしているのか、Co の実態を2つのアンケートの回答から分析した。

(1) 「Co 研修事前アンケート」

9月実施の研修に「教員のためのカウンセリング基礎」がある。話の聴き方を実践的に学ぶ内容で、子どもや保護者の話を聴く機会が多い Co には欠かせない研修である。この研修に向けた事前アンケートで、新任 Co の夏季休業明けの実態を尋ねた。

時期：夏季休業明け 9/7～9/9 対象：全校種新任 Co75名（次期 Co 含む） 回答人数：56名

- Q1 コーディネーターとして、たくさん時間を使っている仕事を一つだけ選んでください。
・児童生徒との日常的な会話 ・個別支援の必要がある児童生徒への対応 ・保護者面談、電話対応
・教材準備 ・担任への助言 ・提出書類作成 ・ケース会議 ・対応記録 ・その他
- Q2 コーディネーターとして、大変だと思う仕事を一つだけ選んでください。
・児童生徒との日常的な会話 ・個別支援の必要がある児童生徒への対応 ・保護者面談、電話対応
・教材準備 ・担任への助言 ・提出書類作成 ・ケース会議 ・対応記録 ・その他
- Q3 夏休み明けの悩みをお書きください。

Q1「最も時間をたくさん使っている」のは、図2の円グラフにあるように「個別支援の必要がある児童生徒への対応」の時間だが、Q2「大変だと思う仕事」については、「保護者面談、電話対応」といった保護者への対応と、多くの Co が回答した。担任や学校への不信感をもっていたり、関係がこじれていたりする保護者の話を聴くことも多くなる Co にとって、保護者への対応は実際には大変な仕事である。また中には、子育てに疲弊して Co に頼りっきりとなり主体性を失う保護者の例も少なくない。信頼を得ているからこそではあるが、Co の負担感は大い。また、大変だと思う仕事の中に「担任への助言」がある。子どもにとって一番身近な支援者の担任に対して、よりよい関係づくりや学級

づくりができるように支援するのが Co だが、担任もそれぞれ様々な考え方をもち、助言を快く受け入れるばかりではない。助言への反発や拒否にならないよう、或いは行き過ぎて追い詰めてしまうことにならないよう、Co はその伝え方に苦慮している。担任への助言が一番難しいという声も、時折聞かされている。そのほか、校内での情報共有や調整に時間がかかることもわかった。Q3「夏休み明けの悩み」については、行き渋りや不登校の増加を挙げた Co が多かった。行き渋り、不登校の状態は一人ひとり違うため、それぞれの対応に追われ時間がない様子が窺える。提出書類の大変さを挙げた Co も複数いた。

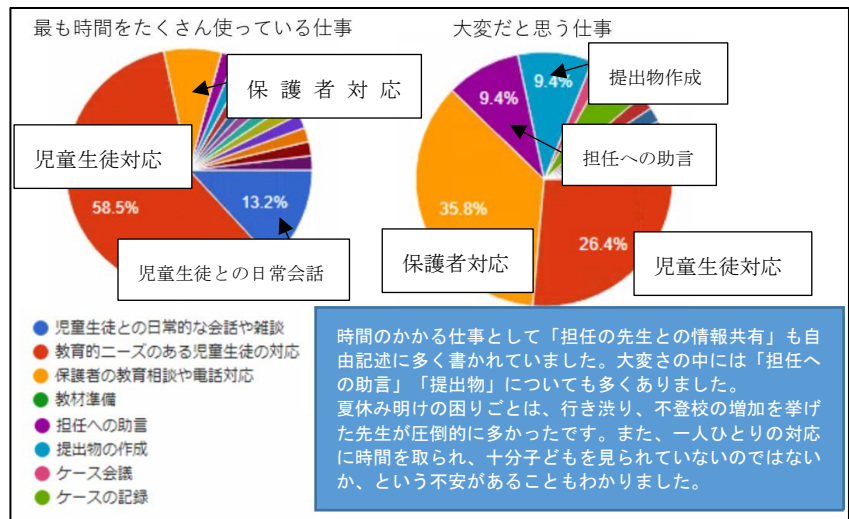


図2 Co 研修事前アンケート回答結果

み

(2)「支援教育の充実にに向けたアンケート」

支援教育課は毎年、支援教育の充実に向けて全 Co に対しアンケートを実施している。今年度は12月に全校種全 Co に実施した。そのうちの問36・38「実施した個別相談の延べ回数」と問37・39「相談内容」、そして問40「Co にとっての困難さ」について、前述(1)の「Co 研修事前アンケート」に関連すると考え、小学校 Co の回答のみを参考とする。

- 問36 Co が実施した児童生徒との個別相談の延べ回数(4月～11月末日)をお答えください。
- 問37 上記のうち、一番多い相談内容をお答えください。
- 問38 Co が実施した保護者との個別相談の延べ回数(4月～11月末日)をお答えください。
- 問39 上記のうち、一番多い相談内容をお答えください。
- 問40 児童生徒・保護者の相談のうち、課題解決に1番困難をきたしているものをお答えください。

問36・37「児童生徒との個別相談」は、平均37.54回。夏休みを除く7か月で割ると5.3回となり、1か月に5～6回の児童の個別相談を受けていると言える。最も多い相談内容は「対人面の悩み」(68人/全小学校 Co114人中)である。子どもの友達関係の悩みに寄り添う Co の姿が思い浮かぶ。問38・39「保護者との個別相談」は、平均64.45回。1か月に9～10回の保護者面談を行っている。最も多い相談内容は「生活・行動面」(62人)だった。平均して週2回は保護者からの相談を受けている実態がわかる。保護者面談が100回を超えた Co は11人。うち2人は300回を超えていた。児童の個別相談数の2倍近い保護者面談数である。児童の相談は、まずは担任が受け止めていると考えてよいだろうか。相談内容では「長期欠席・不登校」が一番多いと答えた Co は16人であったが、問40「最も困難な相談内容」となると、63人の Co が「長期欠席・不登校」と回答し一番多くなった。

全小学校 Co114名分の回答も、(1)の新任 Co の回答と同じ傾向が見られた。Co の仕事は多岐にわたるが、児童に対しても保護者に対しても「対応する」ということは、つまり何か問題が起きた後ということである。Co には「相談を受ける力」が必要不可欠ということが出来るだろう。

2 支援教育コーディネーターのための研修

Co 研修は小中高特すべての校種の Co に実施する。子どもの発達段階の違いに合わせ、同様の内容を扱いつつも一部を除いて小と中高特を分けて開催した。本研究では教育相談センターが担当した、教育相談の視点から深い児童生徒理解を促す研修に着目した。

(1) 今年度実施した研修

①支援教育コーディネーター研修

(※今日的な支援教育課題を内容として選び実施)

| 日程 | 研修名 | 対象 | 内容 |
|--------|-----------------------------------|----|-------|
| 5月10日 | 第1回「コーディネーターの役割」 | 小 | 教育相談 |
| 7月4日 | 第2回「アセスメントの理解」(特別支援教育センター) | 全 | 特別支援 |
| 8月5日 | 第3回「チーム支援のためのケース会議の理解と実際」 | 小 | 教育相談 |
| 8月26日 | 第4回「個別指導計画の作成ワークショップ」(特別支援教育センター) | 全 | 特別支援 |
| 9月12日 | 第5回「教員のためのカウンセリング基礎」 | 全 | 教育相談 |
| 10月21日 | 第6回「外国につながる児童生徒理解と ICT を活用した支援」 | 小 | 支援教育※ |
| 1月30日 | 第7回「児童理解 (学校巡回カウンセラーとの連携)」 | 小 | 教育相談 |

基本的には新任 Co の教育相談力を支えるための研修であるが、次年度の Co 候補や2年目以降の Co も希望により参加している。第1回では、Co 自身がすべて対応できるようになるのではなく、担任が児童理解を基にした児童指導を行うことができるようにする役割をもつ、という意識改革を中心にした。川崎市教員育成指標の学校マネジメントの視点である。第3回はチーム支援のためのケース会議の開き方や運営の仕方を、実際のケース会議を行いながら実践的に学んだ。第5回はカウンセリングマインドによる話の聴き方である。中学校、高等学校、特別支援学校の Co も対象とした。教育相談の視点で、事例の保護者理解を深める様子が多く見られ、中高特 Co にとっても教育相談を学ぶことの有効性を感じたようだった。第6回は外国につながる児童生徒理解である。フィリピンから日本にきた定時制高校女子生徒の弁論VTRを視聴するなど、Co が気づきを得たり実感したりすることができるよう、多文化共生担当者とともに研修内容を考えた。第7回は、心理の視点を学校でどのように活かすことができるかを考える内容である。また第1回のワークシートを用いて自身の Co としての成長を感じ、仕事や学ぶことへのモチベーションを保てるようにした。研修したらすぐにはいかないが、経験しながら繰り返し学ぶことで自身の成長を実感できるようになるのが教育相談研修といえよう。教育相談の研修ではやはり実感を伴うことが重要である。演習やロールプレイに取り組んだり事例を検討したりすることは、研修効果をあげるために大変有効であった。このように研修と経験を通して、「できることが増える」というより「できることの一つ一つが深まったり広がったりする」というイメージで、さらにその一つ一つが「つながる」ことで Co の教育相談力は高まっていくのではないか。「教育相談の視点」から考えた Co としての深い児童生徒理解とは、様々な理解を関連付けることができることにあると言えるかもしれない。

②希望研修

| 日程 | 研修名 | 内容 |
|----------|----------------------------|---|
| 7月25日 | 教育相談Ⅰ 「いじめをうまない学級学校づくり」 | Co による校内研修づくりを研修内容に組み込みながら、グループワークを中心に、いじめの認知や未然防止を学んだ。 |
| 7月26-27日 | 教育相談Ⅱ 「ケース会議の理解と実際」 | 参加者それぞれが困難さを抱えるケースについて、実際にケース会議を行い、児童生徒理解を深めることをねらいとした。 |

| | | |
|-----------|-------------------------|---|
| 8月 18日 | 教育相談Ⅲ 「子どもの自立を考える」 | ジブリ映画を題材にして、親子関係で育まれるものを読み解きながら、愛着形成について学んだ。 |
| 8月 25日 | 教育相談Ⅳ 「教員のための学校精神保健」 | 思春期の「死にたい」と言う子どもに教師としてどのように向き合うのか、講師の話を持ち所にしなが、パネラーとともに考え、交流した。 |

教育相談Ⅳ「教員のための学校精神保健」では、思春期の「死にたい」気持ちにどう向き合うかをいう内容で、そのパネラーとしてCo3人に依頼した。事前に講師からの質問に回答を用意してもらったなどのやり取りを通して、気づきや学びが深かったという感想を得た。

希望研修は、自分のニーズや興味に沿って「教育相談の視点」をさらに焦点化して学ぶ機会である。しぼられた教育相談の視点で児童生徒理解を深く学ぶことは、すでにあるそのほかの自分の知識と関連付けられながら、結果としてさらに深い児童生徒理解へとつながるだろう。また焦点化した具体的な課題は、Coがもっている興味や特徴と関連づけられ、業務の中で児童生徒理解に向かう見方・考え方となり児童生徒指導への自信やモチベーションを高めることになるだろう。

③リクエスト研修

希望テーマ：児童生徒理解・いじめ・不登校・教育相談・保護者対応・希死念慮・自傷行為

リクエスト研修を受ける際はCoとの打ち合わせを丁寧に行い、ニーズを把握するだけでなく、学校の事例をCoが用意したり準備を分担したりすることで、Coの主体性を発揮できるように意識した。研修づくりをともに行うようなイメージが重要と考えた。

(2) 研修へのニーズ調査

Coの研修へのニーズをアンケートにより調査した。(9/26実施 全小学校Co 114名)

- | | |
|----|--------------------------------------|
| Q1 | コーディネーターとして、これまでに役立った研修を教えてください。(記述) |
| Q2 | コーディネーターとして、学びたいと思うことをお書きください。(記述) |

Q1役立った研修には、いじめの研修が多く挙げられた。「問題行動やいじめが起きる前にできること(未然防止・初期対応)」について、何度も学んでいますが、やはりその点については、毎年学びたいです。」と記述にもあるように、新しい知識やスキルアップを目的とするだけでなく、何度も繰り返すことで資質・能力の向上につながることをCo自身も理解していると言える。同じ内容でもその時の状況や立場で学び取るものは違う。また「全ての研修が勉強になり、役立っています。中でも、1年目Coとして参加した『教員のためのカウンセリング基礎～話の聴き方』が、今置かれている自分のCoとしての基本を教えていただき、即実践に役立てられると思いました。わからないことだらけの中、Co研修が心の支えになっています。」とあるように、どの研修にも必要感を感じ、業務の支えや指針となっているという記述も多かった。さらに、「Coとしての物事の捉え方や、対応の仕方など、形ではなく内容面に関するものが役立つと感じています。」という記述には、教育相談力とはまさにそのようなものであるという思いを強くした。理解が関連付けられて深まっていることがわかる。

Q2学びたいことには、不登校や教室に行かれない児童への支援が多く挙げられた。コロナ禍で行き渋り・不登校が増加し、夏休み明け、その対応に追われているというCoの姿と重なる。今最も困っていることと言えるだろう。また、他機関との連携について知りたいという記述も多く見られた。特に新任Coは保護者との相談やケース会議の場で、外部機関についての知識が必要になることを実感しているようである。

3 支援教育コーディネーターに求められる教育相談力

あらためてCoに求められる教育相談力とは、何だろうか。本研究では、Coの実態把握と研修の実施、研修へのニーズ把握から、Coに求められているものを、「支援教育コーディネーターに求められる教育相談の視点」として一覧表に示すことを試みた(表1)。

(表1) 「支援教育コーディネーターに求められる教育相談の視点」 一覧表

| | | | |
|---|--|---|---|
| 児童理解 | ①話を聴くことができる(傾聴):受容的共感的理解をもって相談者の話を聴く | | |
| | ②言語化することができる(整理):相談内容を整理して主訴を理解し、言語化する | | |
| 支援のマネジメント | ③分析することができる(見立て):相談者が困っていることの要因を見立てる、アセスメント | | |
| | ④支援方針を立てることができる:十分な児童理解とアセスメントに基づいた支援を考える | | |
| | ⑤支援の結果を評価し次の支援につなげることができる:確認 見直し 継続 | | |
| ①ケース会議を開く | | | |
| ②教室環境や指導方針など、学級経営および学習指導上の課題を把握して学校全体の教育相談力の向上を図る★ | | | |
| ③校内資源を活用する | | | |
| ④外部機関とつなげる★ | | | |
| ★:不足していると考えられた研修内容 | | | |
| 教育相談の視点 | | | |
| 心理・医療 | | 発達 | 福祉・社会★ |
| ①共感的理解 ②心理教育 ③カウンセリングの技法 ④不登校児童生徒の理解 ⑤いじめの未然防止 ⑥アンガーマネジメント ⑦親子関係 ⑧自傷行為、希死念慮 ⑨PTSD、トラウマ ⑩精神病等 | | ①発達心理学★ ②発達障害 ③障害に応じた様々な手だて | ①性的マイノリティ ②虐待 ③ヤングケアラー ④外国につながる児童生徒 ⑤コロナ不安 ⑥子どもの暴力・犯罪 ⑦SOSの出し方受けとめ方 |
| 子どもに関わる法律 | | | |
| いじめ防止対策推進法 教育機会確保法 | | 障害者差別解消法 | 少年法 児童福祉法 |
| 連携機関★ | | | |
| ①相談室 ②医療機関(心療内科・児童精神科) ③ゆうゆう広場 ④フリースクール ⑤児童精神科 | | ①相談室 ②地域療育センター ③子ども発達相談センター ④通級指導教室 ⑤放課後デイサービス ⑥児童精神科クリニック | ①SSW ②児童相談所・子ども家庭支援センター ③地域みまもり支援センター ④警察 |
| 緊急対応★ | ①身近な人の死に直面したときのリスク理解 ②災害における心理的なリスク理解 | | |
| | ③情報収集能力 ④状況把握とトリアージ(アセスメント) ⑤応急処置(心理教育) ⑥情報の共有(記録と保管) | | |

(1) 児童理解

前述の Co 実態把握からも明らかなように、児童や保護者の個別相談が多いため、Co には「相談を受ける力」が必要である。それには傾聴から始まり、当然聞くだけでなく見立てて支援を考える力まで含まれる。アセスメントに基づいた支援方針を立てることであるから、「相談を受ける力」とは、つまり「児童理解」の視点にはかならない。この児童理解は、一般教員の児童理解よりもさらに深い理解が求められる。それは、担任をはじめとした支援チームが、児童理解に基づいた支援を行なうことができるようにするという役割があるからである。その子が「どうして」そのような行為、行動、状況になったのか児童理解をしようとするとき、様々な角度からの視点が必要となるが、担任ひとりでは十分理解することは難しいケースだから Co がともに関わっているのである。心理的にはどうか、発達的にはどうか、家庭環境はどうか、担任だけでは難しい児童理解をチームで一緒に進めるために、より深い児童理解が不可欠なのである。さらに、児童理解をするためには保護者理解が必要であるケースが多いことも明らかである。そして担任への助言に苦慮する Co の姿があった。担任理解も必要であることを忘れてはならない。担任理解がなければ、そもそも支援チームをつくることができない。それぞれの担任の立場や考えを理解し、校内資源を十分に理解していることが重要である。

(2) 支援のマネジメント

では、理解の先には何があるのだろうか。支援チームが児童理解に基づいた支援を行おうとするとき、Co には、その支援を実際に起動させる「環境調整・運用・活用の力」が求められる。ケース会議を開き、チームで役割分担をしたり必要に応じて連携機関につなげたりするこの力は、「支援のマネジメント」と言い換えることができると考えた。これは川崎市教員育成指標の学校マネジメントの視点でもある。

これまでの研修の実施や Co のかわり、実態把握など、これらのことをまとめると、Co に求められているものとは、「児童生徒理解」の視点と「支援のマネジメント」の視点であると考えた。

(3) 教育相談の視点

生徒指導提要に、教育相談を支える教育相談コーディネーター（川崎市では支援教育コーディネーター）の研修について、「心理学的知識や理論、カウンセリング技法、心理面に関する教育プログラムについての知識・技法だけでなく、医療・福祉・発達・司法についての基礎的知識を持つことが求められます。（3.3.3 教育相談のための教職員の研修）」とある。そこで、この「児童理解」と「支援のマネジメント」を支える視点を「心理・医療」「発達」「福祉・社会」の3つに分けて整理したのが、「支援教育コーディネーターに求められる教育相談の視点」の一覧表である。教育相談において「心理・医療」「発達」「福祉・社会」のこの3つの分野がそれぞれ独立しているわけではなく、密接に重なり合っており明確に線引きできるものではないことは言うまでもない。また、分類する分野を違った視点で整理すれば、さらに違う要素や関係も見えてくるだろう。

(4) 子どもに関わる法律・連携機関

こうして整理してみると、Co に必要な視点や取り扱われる場面は多岐にわたり、内容も簡単ではないことがわかる。また Co の研修ニーズにもあった連携機関に関わる内容は、研修が不足していることがわかった（★印）。とくに福祉的な分野については、より具体的な研修の場が必要である。Co が虐待ケースに関わる頻度が高いことから、今後は SSW の活用を含め、児童相談所との連携についての研修を提供することが必要そうである。また、心理面での発達段階の理解や心理教育の知識を Co が確かなも

のにすることで、校内OJTによる担任への助言もより効果的なものになるのではないかと。担任による低学年への指導や援助がより実態に合わせたものになると、子どもに余計な不安を与えたり過度な要求をしたりしないで済み、結果的に低学年の行き渋りや不登校の減少につながるかもしれない。その意味では、今後効果的な学校巡回カウンセラーの活用が重要となるだろう。

そして「児童理解」の視点でいうと、知識やスキルの不足から、成果が感じられない支援をそのまま継続していたり、支援の見直しがなされないまま外部機関につないだりという実態も見えてきており、「⑤支援を評価する」ということが、適切に支援するためにも重要であると感じている。

さらに、自傷行為や希死念慮から危惧されている「子どもの自殺問題」に向き合ったり、「SOSの出し方受けとめ方教育」をはじめとした課題未然防止教育を考えたりするときには、Coとして緊急対応についての視点も重要であり、これらすべてのベースとなる法律や関係機関の視点は欠くことのできないものであるため、表の下に付け加えた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果と課題

一番の成果は、「支援教育コーディネーターに求められる教育相談の視点」の一覧表を作成したことにある。Coに求められている教育相談力が明らかになり、教育相談センターが実施する研修のねらいがはっきりしてきたと言える。今回まとめた「児童理解」と「支援のマネジメント」の2つの大きな枠組みとなる教育相談の視点は、Coに求められている教育相談力として普遍的なものだろう。今後はそれを支える様々な視点、3つの分類の仕方も含めて見直しながら、必要なことを追加したり、逆に過剰なものを削ったりしていくことで、より充実した表となり研修計画の精選につながるのではないかと考えている。今回、一覧表にたどり着いたことで、来年度の研修には不足しているとわかった視点の内容で計画をすることができた。

課題としては、研修のニーズを把握するアンケートにあった記述「様々な立場の方が関わっているものだと思いますが、方法や制度について話されるときに全体像があると1年目としてはわかりやすいかと感じています。」とあるように、Coが身に付けるべきものを、Co自身にどのように示せるかということである。今年度最後の第7回Co研修のふりかえりに、「Coとして自分ができていることや足りないものについて考えることができてよかった。」とあった。また、「第1回の自分の書いたものを読み返し、何もわかっていなかった自分から少しだけCoの役割を理解できるようになった。自分なりにたくさんかかわってきた。」というふりかえりもあった。Coにとっても自分自身を見つめる時間が大事であり、一覧表がそのときの指針となると良い。さらには、それは仕事へのモチベーションにもつながるのではないかと考えている。Coの業務は、特別支援教育センター、支援教育課、教育政策室、指導課など、多くの部署がかかわっていて、常にその窓口となるCoには、さらに大きな全体像をわかりやすく提示することも必要だろう。また、今年度1回実施した中学校、高等学校、特別支援学校のCoへの教育相談研修は、保護者対応といった場面において、学びの手応えを感じる研修となっていた。中高特のCo研修についても今後どのようにしていくのがよいか、それも考えていかななくてはならない課題である。

2 来年度の研修計画

(1) 支援教育コーディネーター研修

来年度、第6回にはCoの多くが困難を抱えている不登校児童生徒への援助の内容を計画した。不

登校児童生徒への援助の前にまずは児童生徒理解があるが、その児童生徒理解を共有する場としてのケース会議の開催が、Coにとって最も大切な役割の一つである。第3回は、チーム支援につながるケース会議を開催するための力をつける研修として毎年行っている内容である。来年度は、一覧表に整理したことで不足していると考えられた「⑤支援を評価する」を特に意識した研修となるよう、講師の先生と打ち合わせていきたい。第6回の研修において、不登校児童生徒への援助を考えたとき、定期的に支援を確認したり見直したりするケース会議をもつ必要性に、Co自ら気づくような研修としたい。このように、研修と研修が関連しながら効果を上げていくことも一覧表からとらえることができた。第7回は、Coが校内で行う研修づくりを内容と考えた。第7回の研修づくりは、「担任への助言が難しい」というCoを支えるものになるとよいと考えている。発達心理学について確認し、子どもの発達段階を踏まえた指導や援助を、どのように担任に助言すると効果的であるかを考える。ロールプレイなどを取り入れて、より実感的に学べるように計画したい。Coの働きについて考えると、どうしても事後対応のことばかりとなってしまいが、研修の中ではそれぞれの学校の実情に合わせ、Coが行う校内研修を考えられるような場面を多く設定してOJTの推進を図る。それが学校の教育相談力の向上につながり、Coが、問題が起きてからの対応ではなく未然防止の取組に力を発揮できるようになるとよいと考える。

| 日程 | 研修名 | 対象 | 内容 |
|--------|-----------------------------------|----|------|
| 5月12日 | 第1回「コーディネーターの役割」 | 小 | 教育相談 |
| 7月3日 | 第2回「アセスメントの理解」(特別支援教育センター) | 全 | 特別支援 |
| 8月2日 | 第3回「チーム支援のためのケース会議の理解と実際」 | 小 | 教育相談 |
| 8月25日 | 第4回「個別指導計画の作成ワークショップ」(特別支援教育センター) | 全 | 特別支援 |
| 9月13日 | 第5回「教員のためのカウンセリング基礎」 | 全 | 教育相談 |
| 10月24日 | 第6回「不登校児童生徒への援助」 | 小 | 支援教育 |
| 1月30日 | 第7回「発達心理学を踏まえた児童理解の研修づくり」 | 小 | 教育相談 |

(2) 希望研修

外部連携機関についての知識や福祉・社会の分野の視点からの研修が不足していることは、何となく感じられていたが、今回「Coに求められる教育相談の視点」一覧表を作成してみて、それがはっきりとわかった。来年度は、まず教育相談センターが運営する教育相談Ⅰ「ゆうゆう広場見学」を研修に取り入れ、援助の引き出しを増やすことができれば、と考えている。また、虐待のケースに関わることが多いCoにとって、その児童理解が深まることをねらいとして、教育相談Ⅴ「子どもの自立を考える」の題材に虐待をテーマにしたもので計画した。

| 研修名 | 内容 |
|----------------------------|--|
| 教育相談Ⅰ 「ゆうゆう広場見学」 | ゆうゆう広場を知らないCoも多い。見学を通して広場の役割を知り、よりよいつなぎ方などを理解する。連携機関の知識の一つとして、新たに計画した。 |
| 教育相談Ⅱ 「ケース会議の理解と実際」 | 理論と参加者の事例による実際のケース会議で児童生徒理解を深める。 |
| 教育相談Ⅲ 「いじめをうまない学級学校づくり」 | いじめの事例を通じた演習やロールプレイを取り入れ、より実感をもちながら学ぶ。 |
| 教育相談Ⅳ 「教員のための学校精神保健」 | 医療におけるアンガーマネジメントに、キレる子の理解と対応を学ぶ。 |
| 教育相談Ⅴ 「子どもの自立を考える」 | ジブリ映画を題材に、思春期の子どもの心理を読み解きながら、虐待の影響について学ぶ。 |

3 支援教育コーディネーターの教育相談力を支えるために

Co の教育相談力を支える研修づくりについて考えてきた。育成すべき Co の教育相談力とは何かははっきりとし、研修のねらいも明確になってきた。また効果的な研修方法も、これまでの積み重ねの中からだいたいつかめてきた。しかし、指導主事として Co の教育相談力を支えようとするのは、研修によってだけではないだろう。研修とともに、業務で Co を関わる中にそのヒントがあったように思う。

11月に、「荒れている児童との面談を設定したが、何も話してくれなかった。」という相談の電話を2年目 Co から受けた。Co の話を聞き、一緒に児童理解を深め再度の面談設定を提案した。Co はその後担任とよく打ち合わせをして面談を実施した。「どうして」その児童がその行動なのか、を改めて考えることができたようだった。この Co はもともと児童理解を大事にする教育相談力をもった教師である。しかし理屈ではわかっている、実際の場面では感情が動いたり焦ったりするのは当然である。責任感や愛情と、すぐにはどうにもならない現実の間にあり、Co は常に迷い悩みながら実践しているのである。Co に求められる力は、研修を行っただけでは身に付かない。研修とともに学校での日々の経験を通して身に付けていくものだと、Co の教育相談力を支えるために重要だと考える。

Co に伴走する指導主事は、学校の実践と研修をうまく結びつけ、Co がその経験を自身のスキルと関連付けて考えられるようにする必要があるだろう。「Co に求められる教育相談の視点」一覧表は、その意味でも、Co とともに指導主事の役に立つ。一覧表にまとめたものがすべてではないが、一部でも可視化してあることで、研修で学んだスキルと経験を関連付けて捉えやすいはずである。今後は一覧表を Co と共有しながら、Co 自身が即戦力を得てステージアップを図るようなサポートができるとよい。教育相談センター指導主事として、研修を実施しながら経験をサポートすること、それが研修で学んだ Co の教育相談力を支えることになるのではないか、と考えている。

最後に、研究を進めるにあたり、ご支援ご助言くださいました講師の先生、みなさまに、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|--|--------|
| 榊原禎宏・大和真紀子「教育学領域における参加型教員研修の試み」教育実践学研究 12 号 | 2007 年 |
| 井上信子・湯前祐希「教師による「教育相談」及び周辺領域の現状と課題-小学校・中学校・高等学校-」日本女子大学紀要第 25 号 | 2014 年 |
| 春日由美「教師の教育相談的資質向上研修における効果研究」南九州大学人間発達研究第 6 巻 | 2016 年 |
| 辻 あづさ「学校教育相談の意義と教師の役割、今後の展望についての一考察」神奈川大学心理・教育論集第 44 号 | 2018 年 |
| 文部科学省「不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書」 | 2021 年 |
| 文部科学省「生徒指導提要」 | 2022 年 |

【指導助言者】

東海大学文化社会学部教授（川崎市教育委員）

芳川 玲子